

糸を紡いで

—シャロン・クリーチの『めぐりめぐる月』に
織り込まれた物語—

沢 辺 裕 子

はじめに

1995年度のニューベリー賞¹⁾を獲得したシャロン・クリーチ (Sharon Creech, 1945-) の『めぐりめぐる月』²⁾ (*Walk Two Moons*, 1994) には様々な「物語」が織り込まれている。それは主人公自身が語る友人の話であったり、謎の人物から届く格言であったり、母から教わったインディアンの神話、そして授業で習うギリシャ神話や詩であったりする。それらの「物語」はある場面に一度登場するだけでなく、別の場面でその言葉やイメージが繰り返されることによって、エピソードの間に緊密な繋がりを生み、物語全体に統一感を与える役割も果たしている。

この小説の中で「物語」が大切な役割を担うことは、冒頭部分ですでにほのめかされる。ケンタッキー州の架空の町パイバンクスで育ったセネカ族の血を引く十三歳の少女サル (サラマンカ・トゥリー・ヒドゥル) は、一年四ヶ月前に母が家を出て行った後、父との二人暮らしを三百マイル離れたオハイオ州の新しい町で始めた。サルは夏休みに父方の祖母に誘われ、祖父の運転する車でオハイオ州からアイダホ州までの九つの州をまたぐ七日間、二千マイルの旅に出る。それは家出した母が立ち寄った場所すべてを訪れてみる旅だった。その車の中で、祖父がサルに

何か楽しいことを頼む言葉が暗示的だ。

In the car, as we started our long journey to Lewiston, Idaho, my grandfather Hiddle said, “Salamanca, why don’t you entertain us?”

“What sort of thing did you have in mind?”

Gramps said, “How about a story? Spin us a yarn.”³⁾

祖父の「糸を紡いでおくれ」という言葉は、「長い物語を語る」という意味の比喩表現だが、これからこの小説が織物のように糸が縦に横に交差しながら広がってゆくという期待を持たせるような含みのある言葉だ。その期待を裏切ることなく、サルと祖父母の旅の話が縦糸で、サルが祖父母に語って聞かせる話や回想が横糸となって、この小説は織られてゆく。

サルは新しい町で友だちになった風変わりなクラスメイトのフィービー・ウィンターボトムの話語り始めるのだが、フィービーの話をしているうちに、自分の物語がその裏側に隠れていたのに気がついたということを第1章で述べている。

...I told them the story of Phoebe, and when I finished telling them—or maybe even as I was telling them—I realized that the story of Phoebe was like the plaster wall in our old house in Bybanks, Kentucky. (chap. 1, pp. 2-3)

フィービーの物語はまるでバイバンクスの家の漆喰壁のようだというのは、サルの母が家を出て行った後の出来事を指す。サルの両親は古い農家を買取り、少しずつ自分たちで改築をしていたが、妻が家を出た後、

サルは父は居間の漆喰壁を削り始めた。そして妻がもう帰って来ないという知らせが届いた夜、父はその壁をたたき壊す。すると壁の裏側からは煉瓦の暖炉が姿を現したのだった。

On the night that we got the bad news—that she was not returning—he pounded and pounded on that wall with a chisel and a hammer. At two o'clock in the morning, he came up to my room. He led me downstairs and showed me what he had found. Hidden behind the wall was a brick fireplace.

The reason that Phoebe's story reminds me of that plaster wall and the hidden fireplace is that beneath Phoebe's story was another one. Mine. (chap. 1, p. 3)

漆喰壁の裏側に煉瓦の暖炉が隠されていたように、フィービーの物語の奥には私自身の物語があったとサルは語る。この謎のような言葉が、この小説の中における「物語」の重層性を予告しているかのようだ。サルは旅の途中でフィービーの物語を祖父母に語りながら、自分と母との物語を回想し、現実を受け入れてゆくことになる。

サルが自分のフルネーム Salamanca Tree Hiddle の由来を説明しているパッセージには、有名な詩の一節が紛れ込んでいる。

My middle name, Tree, comes from your basic tree, a thing of such beauty to my mother that she made it part of my name.
(chap. 2, pp. 7-8)

この “a thing of such beauty” という表現は、英国ロマン派詩人ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) の長篇物語詩『エンディミオン』

(*Endymion*, 1818) の冒頭を飾る “A thing of beauty is a joy forever” (美しきものはとこしえの喜び) という一行を借りている。現代の児童文学作品の中にこんな風に古典的な詩をこっそり忍び込ませ、それに気づく読者にも密やかな喜びをあたえてくれているのもこの小説の魅力の一つとなっている。

この小説の一番大切な「物語」は、もちろん縦糸のサルと祖父母の話であり、横糸のフィービーとその家族の話、そしてそれを祖父母に語り聞かせながらサルが回想する自分の母の話であるが、ここではそれらに小さな模様として織り込まれたウィンターボトム家に届く謎のメッセージ、神話、詩がそれぞれ小説のなかのエピソードをどのように繋いでいるのか詳細に見てゆきたい。

1. ウィンターボトム家に届く謎のメッセージ

サルがフィービーと出会ったのは、オハイオ州の町ユークリッドに引っ越して来た日のことだった。ユークリッドに到着してすぐ、サルと父は知り合いのマーガレット・カダヴァー夫人を訪ねるが、その隣がフィービーの住むウィンターボトム家だった。転校先でフィービーと同じクラスに入ったサルは、しだいにフィービーと親しくなる。フィービーの家には夫人に会いたいという一人の青年がやって来て、フィービーはその名前も名乗らない青年を気味悪がり、「気違い」と呼び始める。

ある日、フィービーの家から二人が出て来ると、玄関ポーチの階段に差出人不明の白い封筒が置いてあった。

We walked out onto her porch and there, lying on the top step was a white envelope. There was no name or anything on the outside... Phoebe opened it. “Gosh,” she said. Inside was a small piece of blue paper and on it was printed this

message: *Don't judge a man until you've walked two moons in his moccasins.* (chap. 9, p. 51)

中には青い紙が入っていて、「その人のモカシンを履いて二つの月を歩いてみるまでその人を判断してはいけない」という格言めいた文がブロック体で手書きされていた。それはこれから届く謎のメッセージの最初のものだが、思い込みの激しいフィービーはあの間違いが置いていったものだと信じて疑わない。このメッセージは最後の章に至るまで、あちらこちらでサルの語りに生かされる。

サルとベンの感性が似ていることを示すエピソードがいくつか出てくるが、その最初のエピソードにこの「二つの月」が使われる⁴⁾。同じクラスのマアリー・ルーの家でメッセージについて話し合っている時のことだ。メッセージの言葉「二つの月」は二ヶ月間のことを指しているが、サルは小さい頃、父がその格言を使うたびにインディアンの靴の中に座っている二つの月を想像していたと言う。

“... I used to imagine that there were two moons sitting in a pair of Indian shoes, but my father said it means that you shouldn't judge someone until you've walked in their moccasins. Until you've been in their shoes. In their place.”

... When Ben came into Mary Lou's room, she asked him what he thought it meant. He took a sheet of paper from her desk and quickly drew a cartoon. It was a little spooky, because what he drew was identical to what I used to imagine: a pair of Indian moccasins with two moons in them. (chap. 11, p. 61)

マアリー・ルーの家に居候しているいとこのベンは、このメッセージの

意味を聞かれ、いつも通り漫画を描くが、その絵はサルがかつて想像していた光景と全く同じだった⁵⁾。

この場面の直前で、フィービーとサルがメアリー・ルーの家遊びに行こうとした時、二つ目のメッセージが玄関ポーチに残されていた。

As we left Phoebe's house, there on the front steps was another white envelope with a blue sheet of paper inside. The message was: *Everyone has his own agenda.*

Phoebe and I looked up and down the street. There was no sign of the message-leaver. (chap. 11, p. 60)

「誰もが自分のすべきことで忙しい」というような意味のこのメッセージも、これ以降サルの思いの中で何度も出てくる。ウィンターボトム夫人はフィービーが気違いと呼ぶ青年が自分の留守中に訪ねて来て以来、なぜか悲しそうにしていた。母の気持ちも察せず、自分のチア・リーディングのオーディションのことだけに夢中になるフィービーの姉ブルーデンスの思いやりのない態度に、サルは自分と母のことを思い出す。

I could tell that Mrs. Winterbottom was trying to rise above some awful sadness she was feeling, but Prudence couldn't see that. Prudence had her own agenda, just as I had had my own agenda that day my mother wanted me to walk with her. I couldn't see my own mother's sadness. (chap. 17, pp. 104-105)

ブルーデンスが自分の「すべきこと」に忙しくて自分の母の悲しみに気づかないのと同じように、サルの母がどうしてもやりたかったことを、自分の「すべきこと」の方が大事で、サルは一緒にしてあげなかった。

友人の母の悲しみはわかるのに、サルには自分の母の悲しみがわからなかった。何度も散歩に行こうと母に誘われたのに、外は小雨だし、机の片付けをしていたサルはその母の誘いをきつい言葉で断ってしまったのだ。

What I started doing was remembering the day before my mother left. I did not know it was to be her last day home. Several times that day, my mother asked me if I wanted to walk up in the fields with her. It was drizzling outside and I was cleaning out my desk, and I just did not feel like going. “Maybe later,” I kept saying. When she asked me for about the tenth time, I said, “No! I don’t want to go. Why do you keep asking me?” I don’t know why I did that. I didn’t mean anything by it, but that was one of the last memories she had of me, and I wished I could take it back. (chap. 17, pp. 103-104)

母の散歩の誘いを断ったこと自体はそう深刻なことでもないかもしれないが、その翌日に母が家を出て行ってしまったとなれば、この日の思い出はサルにとってかなりつらいはずだ。そしてその気持ちは次のメッセージが届いた後でさらに描かれる。

ブルーデンスが自分の母に絶対チア・リーディングのオーディションを見に来てはいけけないと言っている最中に、フィービーが三つ目のメッセージを持って家に入って来る。

I heard the front door open and shut and Phoebe came in the kitchen waving a white envelope. “Guess what was on the steps?” she said.

Mrs. Winterbottom took the envelope and turned it over and over before she slowly unsealed it and slipped out the message.

“Oh,” she said. “Who is doing this?” She held out the piece of paper: *In the course of a lifetime, what does it matter?*

(chap. 17, p. 105)

「人生の過程で、大切なのは何か？」というメッセージを読み、ウィンターボトム夫人は顔色を変えるが、些細なことと言い合いをする二人の娘たちはそのことに気づかない。小説の後半になってからわかることだが、「気違い」とフィービーが呼ぶ青年は、実はウィンターボトム夫人が結婚する前に産んですぐ養子に出した息子だった。このメッセージが届けられた後、ウィンターボトム夫人は家を出てしまう。家庭を守ることだけに専念していた夫人が、このメッセージをきっかけとして、本当に大切なのは何かを確かめるために息子に会いに行ったことが後になってわかる。一方サルは、ウィンターボトム家からの帰り道、そのメッセージと自分の母のことを思う。

As I walked home, I thought about the message. *In the course of a lifetime, what does it matter?* I said it over and over. I wondered about the mysterious messenger, and I wondered about all the things in the course of a lifetime that would not matter. I did not think cheerleading tryouts would matter, but I was not so sure about yelling at your mother. I was certain, however, that if your mother left, it would be something that mattered in the whole long course of your lifetime.

(chap. 17, p. 106)

チア・リーディングは人生の中でそんなに大切なことではないが、母に怒鳴ってしまったことはどうなのだろうとサルは思う。しかしその後で母が家を出てしまったとなれば、それは“in the whole long course of your lifetime”の中で重大なことに違いないとサルは確信する。届いたメッセージにさらに“whole long”とサル自身が付け加えている言葉が、人生でこれからもずっと、一生後悔することになる出来事だったというサルのつらさを語っている。

娘たちには戸締まりや夕食の指示を、夫にはしばらく家を出ることを書いた短い手紙を残してウィンターボトム夫人は家を出た。なぜ母が家を出て行かなければいけなかったかを理解できないフィービーは、あの気違い青年に誘拐されたのだという突拍子もない結論を導き出し、その証拠を探し始める。

そんなウィンターボトム家に四つ目のメッセージが届く。

... another message appeared: *You can't keep the birds of sadness from flying over your head, but you can keep them from nesting in your hair.* Phoebe brought the message to school to show me. “The lunatic again,” she said. (chap. 24, p. 154)

「悲しみの小鳥たちが頭上を飛んでゆくのを避けることはできないが、その小鳥たちが自分の髪の中に巣を作るのは避けることができる」というメッセージだった。サル以外のクラスメイトには母の家出を内緒にしているフィービーは、母が家にいないことを隠すために次々と嘘をついてゆかなければならず、彼女の苦しそうな様子を見てサルはこう思う。

Phoebe couldn't help it. She looked as if a whole family of the birds of sadness were nesting in her hair. (chap. 24, p. 155)

その様子は、悲しみの小鳥の大家族がフィービーの髪の中に巣を作ってしまったかのようにだと、“a whole family of” という言葉を付け足してサルは思うのだった。

このメッセージの小鳥たちはさらにフィービーの父をも襲う。食器の洗い方をあれこれ批判するフィービーの言葉に、父は洗う手を止めた。

“You’ve probably washed that plate enough,” Phoebe said. He had been rubbing it around and around with the dishcloth. He stopped and stared down at the plate. I could practically see the birds of sadness pecking at his head, but Phoebe was busy swatting at her own birds. (chap. 25, p. 162)

悲しみの小鳥たちが父の頭をつついていてというのに、フィービーは自分の小鳥たちを追い払うのに忙しくて、それに気がつかない。サルは届いたメッセージの小鳥のイメージを膨らませて友人の家の悲しい様子を描写する。

母からの電話を毎日待っているフィービーだったが、こともあろうに母が電話してきたのは隣のカダヴァー夫人で、その伝言は「自分はだいたいじょうぶだから」という簡単なものだった。カダヴァー夫人が看護師でありながら、カダヴァー (Cadaver) という名前が「死体」を意味する言葉であるのを気味悪がっていたフィービーは、未亡人のカダヴァー夫人は夫を殺して庭に埋め、死体を隠すためにシャクナゲの木を移植したのだと前々から思っていた。そこにカダヴァー夫人から母の伝言が届いて、今度は自分の母はカダヴァー夫人に殺されて庭に埋められたのかもしれないと思い始める。

サルとフィービーはカダヴァー夫人が夜勤で出掛けた隙に彼女の家に忍び込んでみたり、警察に今までに届いたメッセージ四つを持って行っ

たりしたが、フィービーの母の行方はわからない。そんなある日、最後となる五つ目のメッセージを持ってフィービーが学校にやって来た。

Phoebe arrived at school with another message, which she had found on her porch that morning: *We never know the worth of water until the well is dry.* “It’s a clue,” Phoebe said. “Maybe my mother is hidden in a well.” (chap. 31, p. 198)

「井戸が干上がるまで水のありがたさはわからない」というメッセージだった。あくまでも母が誘拐されたと信じたいフィービーは、これは母が井戸に閉じ込められている手がかりかもしれないと思う。五つ目のメッセージも持って再び警察に行く二人だったが、今回もまったく相手にしてもらえなかった。

この間、全く何の関係もないように思っていた人びとが家族だとわかる場面も登場する。カダヴァー夫人は盲目の母パトリッジ夫人と一緒に暮らしていたが、ある日パークウェイ先生がやって来て、その場に偶然居合わせたサルは、パークウェイ先生はパトリッジ夫人の息子で、しかもカダヴァー夫人とは双子であることを知った。母が家出をして家族がばらばらになっているサルとフィービーの物語の横で、このように家族の「再会」めいた物語も織り込まれている。しかも初めはただの端役のように見えるこの三人が、サルやフィービーの物語に深く関わっていたことが、後になってわかってくる。

パークウェイ先生は、夏休みの宿題に出した日記を英語の授業でみんなの前で読むうちに、フィービーが書いた日記にカダヴァー夫人が夫を殺して庭に埋めたにちがいない、というパッセージを見つける。その日の夜、パークウェイ先生はウィンターボトム家を訪れ、カダヴァー氏がどういう状況で亡くなったかをフィービーに説明する。

“I want to explain something,” he said. “Mrs. Cadaver is my sister.”

“Your sister?” Phoebe said.

“And her husband is dead.”

“I thought so,” Phoebe said.

“But she didn’t murder him,” Mr. Birkway said. “Her husband died when a drunk driver rammed into his car. My mother—Mrs. Partridge—was also in the car with Mr. Cadaver. She didn’t die, as you know, but she lost her sight.”

“Oh—” I said. Phoebe stared at the floor.

“My sister Margaret was the nurse on duty in the emergency room when they brought in her husband and our mother. Margaret’s husband died that night.”

... “I just wanted you to know,” Mr. Birkway said, “that Mr. Cadaver is not buried in her backyard. I’ve also just learned about your mother, Phoebe, and I’m sorry that she’s gone, but I assure you that Margaret would not have kidnapped or murdered her.” (chap. 33, pp. 218-19)

カダヴァー氏が義母パートリッジ夫人を乗せて運転する車に、酔っばらい運転の車が突っ込み、カダヴァー氏とパートリッジ夫人は、カダヴァー夫人の働く救急病院に運び込まれた。母は失明したものの命は助かったが、夫は亡くなった。その話を聞いた夜、サルはカダヴァー夫人のその夜の行動を、今までに届いた五つのメッセージと絡み合わせて想像する。

At home that night, all I could think about was Mrs. Cadaver. I could see her in her white uniform, working in the

emergency room. I could see an ambulance pulling up with its blue lights flashing, and her walking briskly to the swinging doors, with her wild hair all around her face. I could see the stretchers being wheeled in, and I could see Mrs. Cadaver looking down at them.

I could feel her heart thumping like mad as she realized it was her own husband and her own mother lying there. I imagined Mrs. Cadaver touching her husband's face. It was as if I was walking in her moccasins, that's how much my own heart was pumping and my own hands were sweating.

I started wondering if the birds of sadness had built their nest in Mrs. Cadaver's hair afterward, and if so, how she got rid of them. Her husband dying and her mother being blinded were events that *would* matter in the course of lifetime. I saw every-one else going on with their own agendas while Mrs. Cadaver was frantically trying to keep her husband and her mother alive. Did she regret anything? Did she know the worth of water before the well was dry?

All those messages had invaded my brain and affected the way I looked at things. (chap. 33, pp. 220-21, underlines added)

母が家を出て行ってしまった後、ケンタッキー州で暮らしていた父と、オハイオ州に暮らすカダヴァー夫人がどのように知り合ったか、二人は何度かサルに説明しようとするが、サルは断固として聞こうとしなかった。母が帰って来ないことがまるでカダヴァー夫人のせいであるかのようになり、サル自身も今まではフィービーと同じくらい、あるいはフィービーよりもカダヴァー夫人を嫌っていた。しかしバークウェイ先生から

真相を聞き、ここでサルはカダヴァー夫人の立場に立って、カダヴァー夫人の目線から、事故があった日のことを心に描いている。その中にウィンターボトム家に届いた五つのメッセージをすべて登場させることによって、いかにそれらのメッセージがサルの心の中にも深く浸透していたかをこの場面は示している。サルのカダヴァー夫人に対する感情がドラマティックな転換点を迎えたこの場面は、サルの心の大きな成長がわかる大切な場面であり、そこに五つのメッセージを集結させているのが見事だ。

小説の後半で、サルの母は目的地のアイダホ州ルイストンに着く直前、蛇行した山道を下るバスが事故を起こし、亡くなっていたことがわかる。長いバスの旅で席が隣り合ったサルの母と知り合い、最後の瞬間までサルの母の手を握っていた、たった一人の生存者がカダヴァー夫人だったのだ。妻の遺体を引き取りに行ったサルの父が、そのカダヴァー夫人と知り合ったという経緯を、サルはカダヴァー夫人の口から聞く。

あと一日でルイストン、というところで祖母が脳卒中で倒れ入院してしまう。翌日の母の誕生日までにどうしてもルイストンに辿り着きたいサルの気持ちを察し、祖父はサルを一人で行かせる。車の運転は農場で祖父に習っていたとはいえ、夜中に山道を下るのはそれとは話が違う。サルはルイストンまでの最後の長い下り坂を、母が最後に辿った道のを、大きな恐怖の中で一人で体験する。ルイストンを見下ろす丘の上に眠る母の墓を自分の目で見るまで、サルは本当には母の死を納得できないでいた。ここまでは祖父母に連れて来てもらったが、最後のこの道はサル自身が一人で進まなければならないものだった。

小説の最終章では、父とともにケンタッキー州に戻ったサルが、農場で小型トラックを乗り回しながら祖父と始めた新しいゲームのことが描かれる。それは交代で「誰か別の人のモカシンを履いてみる」ゲームだった。フィービーの立場に立ってみたり、旅の途中で脳卒中で亡くなって

しまった祖母の立場に立ってみたり、ベンの立場に立ってみたりするのだ。そんなゲームの中で、サルは祖父母との旅が母のモカシンを履いてみる旅だったことに気づく。

On and on we go. We walk in everybody's moccasins, and we have discovered some interesting things that way. One day I realized that our whole trip out to Lewiston had been a gift from Gram and Gramps to me. They were giving me a chance to walk in my mother's moccasins—to see what she had seen and feel what she might have felt on her last trip. (chap. 44, p. 276)

モカシンがインディアン履物であることも、この場面で一番痛切に感じられるのではないだろうか。ここまでは他人の立場に立ってみるといふ一般的な意味で捉えられていた「モカシンを履いてみる」という表現が、サルが母のモカシンを履いた瞬間、そこにはインディアンであることを誇りにしていた母の気持ちが重なり、インディアンの伝統を引き継ぐといった意味まで透けて見えてくるようにも感じられる。

サルは母がもっと子どもを欲しがっていたことに嫉妬を感じていたが、母のモカシンを履いてみることで、それも今では理解できるようになっていた。

... I am jealous that my mother had wanted more children. Wasn't I enough? When I walk in her moccasins, though, I say, "If I were my mother, I might want more children—not because I don't love my Salamanca, but because I love her so much. I want more of these." (chap. 44, pp. 278-79)

私を愛していないからではなく、私をとっても愛していたからこそ、もっとそうしたくて母は子どもがたくさん欲しかったのだ、とサルは納得する。

このようにウィンターボトム家に届いた五つの謎のメッセージは小説の初めの方から最終章まで、単にエピソードを構成する一つの道具としてだけではなく、その後のエピソードにも最後まで影響を与えるものとして存在している。結局これらの謎のメッセージは、気違い青年から届く手がかりでもなんでもなく、カダヴァー夫人の母パートリッジ夫人が届けていたものだということが、小説の後半になってから明かされる。

“It was you, wasn't it?” Phoebe said. “You've been creeping around leaving these things, haven't you?”

“Did you like them?” Mrs. Partridge said. . . . “Margaret reads them to me from the paper each day, and when there's a nice one, I ask her to copy it down. . . .”

“But why did you bring them *here*?” Phoebe said.

“I thought they would be grandiful [*sic*] surprises for you —like fortune cookies, only I didn't have any cookies to put them in. Did you like them anyway?” (chap. 40, p. 253)

パートリッジ夫人は娘が読んでくれる新聞の中に気に入った格言があると紙に書いてもらい、それをウィンターボトム家に届けていた。そんなことをする理由を訊かれたパートリッジ夫人の「占いクッキーのような“grandiful surprises”をあげようと思ってさ」という言葉の裏には、表面的にはうまくいっているように見えたウィンターボトム家に足りなかったものが盲目のパートリッジ夫人には見えていた、ということが隠されているのかもしれない。それまでにも、盲目のパートリッジ夫人に

は普通の人は気づかないことに気づく能力がある、というエピソードがいくつか挿入されていた⁶⁾。

気違いとフィービーが呼んでいた青年も、実はウィンターボトム夫人が結婚前に養子に出した息子だということがわかる。家を出てその息子と一緒に時間を過ごしていたウィンターボトム夫人が、息子を連れて家に戻り、衝撃を受けた家族もしだいにその新しい青年の存在を受け入れてゆく。この話の流れからも、この青年の登場はあの五つのメッセージと同じように、謎でありながら“grandifful surprises”の一つであったことが暗示されて、サルが祖父母に語ったフィービーの物語も終わる。

2. 神話

サルが母から語り聞かされたインディアン神話や、パークウェイ先生の授業で習うギリシャ神話も、エピソードを繋ぐ役割を果たしている。文字を持たないインディアン神話や伝説が口承で伝えられてきたことを考えると、インディアンの少女サルが「物語る」この一人称小説に、さらに口承で伝えられてきた神話が織り込まれていることも興味深い。

隣のカグヴァー夫人の庭仕事を、なぜか英語のパークウェイ先生が手伝いに来たことを目撃して、フィービーは二人が共謀してカグヴァー氏を殺して庭に埋めたと思い始める。シャクナゲの茂みを植え替えているのも、死体を埋めた場所を隠すために違いないとサルに話す。自分の父とカグヴァー夫人の仲を快く思わないサルは、殺人に関しては半信半疑だが、パークウェイ先生がカグヴァー夫人を連れ去って結婚でもしてくれればいいのにと願い始める。そうすれば父はバイバンクスに帰る気にもなり、元通りの暮らしを送ることができる。もちろんこの時点で、カグヴァー夫人とパークウェイ先生が双子だということはサルもフィービーも知らない。

翌日、サルは英語の授業中にパークウェイ先生を観察し、意外なこと

に思い当たる。

What I found most surprising about Mr. Birkway was that he increasingly reminded me of my mother—or at least of my mother *before* the sadness set in. There was a liveliness to both Mr. Birkway and my mother, and an excitement—passion—for words and stories.

That day, as Mr. Birkway talked about Greek mythology, I started daydreaming about my mother, who loved books almost as much as she loved all her outdoor treasures. . . .

My mother especially liked Indian stories. She knew about thunder gods, earth-makers, wise crows, sly coyotes, and shadow souls. Her favorite stories were those about people who came back, after death, as a bird or a river or a horse.

(chap. 19, pp. 116-17)

バークウェイ先生の言葉や物語に対する情熱が、サルに自分の母を思い出させる。バークウェイ先生がギリシャ神話の話をしている間、サルは母が戸外の自然と同じくらい物語を愛していたことを思い出す。様々な物語が織り込まれているこの小説の中で、主人公サルの母も物語が大好きだった、という設定になっているところがいい。サルの母が特に好きだった話は、死んだ後に鳥や川や馬となって蘇る人の話だった。このことは、死んだサルの母がバイバンクスのあらゆるものの中に存在しているようにサルや父が感じているという、後述するエピソードとも重なる。これ以降、バークウェイ先生の教えるギリシャ神話とサルが母から聞いたインディアン神話はいくつかの場面に出てくることになる。

第23章では、サルと祖父母がサウス・ダコタ州のバッドランズ国立公

園に立ち寄る場面が登場するが、ここはなぜサルの母が家を出て行ってしまったかを読者が知る章でもある。バッドランズの空の高さに見とれ、サルは母から聞いたインディアンの神話の一つを祖父母に教える。

I told Gram and Gramps a story that my mother had told me about the high sky, which looked higher here than anywhere else I had been. Long ago, the sky was so low that you might bump your head on it if you were not careful, and so low that people sometimes disappeared right up into it. People got a little fed up with this, so they made long poles, and one day they all raised their poles and pushed. They pushed the sky as high as they could. (chap. 23, p. 144)

昔、空は頭をぶつけるほど低く、時には空の中に人が消えてしまうこともあったが、人びとが力を合わせ長い棒を使って空を持ち上げたという神話だ。これはサルが母からインディアン神話を聞いて育ったことがわかる最初の場面だ。小説の初めの方で、サルの母がインディアンであることを誇りに思い、ネイティブ・アメリカンという言葉よりもインディアンという言葉の方がいい、と言っていたエピソードとも響き合う。

My mother had not liked the term *Native Americans*. She thought it sounded primitive and stiff. She said, “My great-grandmother was a Seneca Indian, and I’m proud of it. She wasn’t a Seneca Native American. *Indian* sounds much more brave and elegant.” In school, our teacher told us we had to say Native American, but I agreed with my mother. *Indian* sounded much better. My mother and I liked this Indian-ness in our

background. She said it made us appreciate the gifts of nature; it made us closer to the land. (chap. 10, pp. 56-57)

インディアンという言葉の方がもっと「勇気があり優雅に」響き、自然の恵みに感謝し、大地に根付いて暮らすことを私たちにさせてくれている、とサル之母は言っていた。母の言葉の中の「勇気」は、サルにとっても大切な美德であることが、旅の後でサルが辿り着いた結論からもわかる。

車の外で三人が座って景色を眺めている時に一人の妊婦がやって来て、サルはその場を立ち去る。サルが妊娠している女性を恐れる理由は、この後のサルの回想から想像がつく。一人で歩きながらサルは母が妊娠していた時のことを思い出す。念願の二人目の子どもを妊娠し、「家を子どもで一杯にするのよ」と喜びに溢れていた母だった。しかしある日サルが草原の向こうにある木立から転落して脚を骨折し、夕方になっても家に戻らないサルを捜しにやって来た母が、家までのかなりの距離をサルを背負って歩いた。出産予定日まであと三週間だった母は、その日の夜に赤ん坊を死産し、しかも出血が止まらず子宮摘出手術を受けることになる。もう二度と子どもを産めない体になってしまったのだ。

その出来事を回想したサルは崖の縁に座り、母もバッドランズに立ち寄った時にこの場所に座っただろうか、私のことを思い出したのだろうかと考えながら、峡谷の向こう側に石を投げ、母から教わったもう一つのインディアンの神話を思い出している。

My mother once told me the Blackfoot story of Napi, the Old Man who created men and women. To decide if these new people should live forever or die, Napi selected a stone. “If the stone floats,” he said, “you will live forever. If it sinks, you will

die.” Napi dropped the stone into the water. It sank. People die.

“Why did Napi use a stone?” I asked. “Why not a leaf?”

(chap. 23, p. 150)

人類を創造したナピが人の運命を決める際に、水に石を落とし、石が水に浮かんだら不死に、沈んだら死ぬ運命にしようとした。もちろん石は沈み、人間は死ぬ運命を与えられたという神話だ。それを聞いた小さかったサルは、「どうしてナピは石を使ったの？ どうして葉っぱじゃないの？」と母に訊いている。ここでサルは何度も石を峡谷に投げてみるが、石は浮くはずもなく、どこまでも峡谷の奈落へと落ちていってしまう。この時点では読者もサルの母の家出は知っているが、バスの事故で亡くなったことは知らない。サル自身も母の死が未だに納得できず、何かの間違いかもしれないと思っている。母の誕生日までにアイダホ州ルイストンに辿り着けば、もしかすると母を連れて帰って来ることができるかもしれないとずっと祈り続けているのだ。サルの母の死を読者が知った後でこのパッセージを読み返すと、この場面で石が浮くかもしれないと投げているサルの気持ちが、さらに重みを持って迫ることになるだろう。

フィービーの母が家出をしてしばらく経ってから、学校ではベンがプロメテウスの発表をする日がやって来る。主神ゼウスから火を盗み、人類に火を与えたプロメテウスの神話だ。怒り狂ったゼウスは罰として、人類にはパンドラという女性を送り込み、プロメテウスには山頂でハゲタカに毎日肝臓をついばまれる半永久的な拷問を与えた。この場面では神話の内容と並んで、言葉よりも漫画で気持ちを伝えるのが得意なベンが、口頭発表ではかなり緊張している様子が描かれてもいる。

In English class, Ben had to give his mythology report. He was nervous. He explained that Prometheus stole fire from the sun and gave it to man... In Ben's nervousness, he mispronounced Prometheus, so what he actually said was that Zeus sent vultures down to eat porpoise's liver. (chap. 24, p. 155)

そして人類に送り込まれたパンドラについてのフィービーの発表が次の週に行われる。フィービーは前週のベンの発表の間違いを訂正するところからパンドラの話始める。

“For some reason, Ben already talked about my topic, Pandora, when he did his report on Prometheus. However, Ben made a few little mistakes about Pandora.”

Everyone turned around to stare at Ben. “I did not,” he said.

“Yes, you did... Pandora was *not* sent to man as a *punishment*, but as a *reward*—” (chap. 27, p. 172)

フィービーはパンドラが人類に対する罰ではなくご褒美として送られた女性であることを説明する。パンドラをより歓迎されるご褒美にするために神々があらゆる贈り物をこの女性に与えた。パンドラという名前が“the gift of all” という意味である由縁だ。

フィービーは神々からの贈り物のうち二つを詳しく説明する。一つは好奇心であり、もう一つは絶対に開けてはいけない箱だった。しかし好奇心を授けられたパンドラはその箱を開けずにはいられない。

“Inside the box were all the evils in the world, such as hatred, envy, plagues, sickness, and cholesterol. There were

brain tumors and sadness, lunatics and kidnapping and murders”
—she glanced at Mr. Birkway before rushing on—“and all that
kind of thing. Pandora tried to close the lid when she saw all
the horrible things that were coming out of it, but she could not
get it closed, and that is why there are all these evils in the world.
There was only one good thing in the box . . . the only good thing
in the box was Hope, and that is why, even though there are
many evils in the world, there is still a little hope.”

(chap. 27, p. 174)

箱からは世の中の悪しきものすべてが出て来てしまう。しかし箱の底にはたった一つだけ良いものが入っていて、それは「希望」だった。憎しみ、嫉妬、伝染病、病気、は神話通りだが、コレステロール、脳腫瘍、悲しみ、気違い、誘拐、殺人はフィービーが付け加えたものだと読者にはわかるだろう。ウィンターボトム家は食事のコレステロールを非常に気にしているというエピソードもすでに紹介され、母の家出の後、自分は脳腫瘍ではないかと心配するフィービーの話もあった。この小説の中に様々な物語が散りばめられているように、フィービーもギリシャ神話の発表の中に自分の心配事を混ぜ合わせている。

その日の夜、サルはパンドラの箱のことを考え続ける。

That night I kept thinking about Pandora’s box. I wondered why someone would put a good thing such as Hope in a box with sickness and kidnapping and murder. It was fortunate that it was there, though. If not, people would have the birds of sadness nesting in their hair all the time, because of nuclear war and the greenhouse effect and bombs and stabbings and lunatics.

どうして病気や誘拐や殺人の詰まったそんな箱に希望を入れたのかと不思議に思うサルだが、そうでなければ、世の中には核戦争、温室ガス効果、爆弾、刺殺、気違いなどがあるのだから、悲しみの小鳥が常に人びとの髪の中に巣食ってしまうだろうとも思う。サルもフィービーと同じように神話に自分の懸念を織り交ぜ、さらにあの謎のメッセージの一つ「悲しみの小鳥たち」のイメージも投入している。それからサルは、すべての良いものが入ったもう一つの箱があったに違いない、それではたった一つの悪いものは何だろうと考える。

There must have been another box with all the good things in it, like sunshine and love and trees and all that. Who had the good fortune to open that one, and was there one bad thing down there in the bottom of the good box? Maybe it was Worry. Even when everything seems fine and good, I worry that something will go wrong and change everything. (chap. 27, p. 175)

良いものばかりの箱に入ったたった一つの悪いものは「心配」かもしれないとサルは思う。これは小説の最初の部分でサルの怖れるものがリストアップされていた場面を思い起こさせる。教室に現れた蜘蛛をつかまえたサルがクラスメイトたちに勇気があるとたたえられた時に思ったことだ。

I, Salamanca Tree Hiddle, was afraid of lots and lots of things. For example, I was terrified of car accidents, death, cancer, brain tumors, nuclear war, pregnant women, loud noises,

strict teachers, elevators, and scads of other things.

(chap. 3, pp. 13-14)

サルの怖いものの中でも、特に車の事故、死、妊婦などは、その後の話の展開を考えると、この時点ではわからなかった切なさが伝わってくる。癌というのも、母がルイストンから戻ってこなくなった理由としてサルが想像した理由の一つだった。癌であることをサルに隠すため、ルイストンから帰ってこないのだと思いたかったのだ⁷⁾。恐怖を克服するためのサルにとっての勇気は、パンドラの箱のイメージとともに、最終章でもう一度語られることになる。

良いものばかりが入っている箱に紛れ込んでいるたった一つの悪いものが「心配」であるとサルが思うことは、母がもう帰って来ないという知らせを受け取ってからの別の場面にも結びつく。故郷バイバンクスの農場にはサトウカエデの木とアスペンの木が並んで立っていた。サルはサトウカエデの木に登るのが好きだったが、ある時アスペンの中で姿の見えない小鳥がさえずるのを聞いて、その木を「歌う木」と名付ける。事故の知らせを受けアイダホ州に行った父の留守を預かりに祖父母がやって来るが、サルは一日中サトウカエデの上で「歌う木」が歌い始めるのを待つ。その時のサルの気持ちはまさに「心配」であり、そしてそれは祈りに似た行為であっただろう。日が暮れても木のそばから離れないサルを思いやり、祖父が木の根元に寝袋を並べて三人はそこで夜を過ごす、その木が歌うことはなかった⁸⁾。

プロメテウスの火やパンドラの箱は、小説の最終章にも登場している。旅の後でバイバンクスに戻ったサルが祖父と例の「モカシンを履いてみる」ゲームをしている時のことだ。

One afternoon, after we had been talking about Prometheus

stealing fire from the sun to give to man, and about Pandora opening up the forbidden box with all the evils of the world in it, Gramps said that those myths evolved because people needed a way to explain where fire came from and why there was evil in the world. That made me think of Phoebe and the lunatic, and I said, “If I were walking in Phoebe’s moccasins, I would have to believe in a lunatic and an axe-wielding Mrs. Cadaver to explain my mother’s disappearance.” (chap. 44, pp. 276-77)

これらの神話は、どこから火が来たのか、なぜ世の中には悪があるのかなどを説明するために人間が造り出したものだと祖父が言う。それを聞いたサルはフィービーのモカシンを履いてみて、もし自分がフィービーの立場だったら、母がいなくなったことを説明するために、気違いや斧を振るうカダヴァー夫人がいることを信じたかっただろうと納得する。パンドラの箱のエピソードは、詩とも最終章で絡み合うので、それは次の項目で見たい。

小説の終り近く、農場の土地でトラックの運転の練習をしながらサルが母から教わったインディアンの神話を祖父に語り聞かせている場面も登場する。その中でサルも祖父も一番好きなのはナヴァホ族の女神エストァナトレヒの物語だった。

When I drive Gramps around in his truck, I also tell him all the stories my mother told me. His favorite is a Navaho one about Estsanatlehi. She’s a woman who never dies. She grows from baby to mother to old woman and then turns into a baby again, and on and on she goes, living a thousand, thousand lives. Gramps likes this, and so do I. (chap. 44, p. 278)

エスツァナトレヒは不死の女神で、赤ん坊から大人になり老女になるとまた赤ん坊に生まれ変わる、西洋の伝説で言えば不死鳥のような存在だ。母を突然失ったサルと五十年以上連れ添った最愛の妻を旅の途中で亡くした祖父が、二人ともこの不死の女神の物語を好むのは、人間の根源的な望みであるという一般的な概念とは別の、もっと個人的な次元で理解できる。

祖父は自分たちが結婚したアスペンの森に祖母を埋葬し、毎日その墓を訪れる。祖父にとって祖母は心の中ではいまでも生きている存在なのだ。そしてサルにとっても母は、故郷バイバンクスの木々にも納屋にも野原にも感じられる存在だ。

... we didn't need to bring her body back because she is in the trees, the barn, the fields. (chap. 44, p. 276)

このことはサルの母が亡くなっていることをまだ読者が知らない場面でもすでに二度描かれていたことだった。なぜバイバンクスから引っ越さなければならぬか、サルの父はサルにこう説明した。

... "we have to leave because your mother is haunting me day and night. She's in the fields, the air, the barn, the walls, the trees." (chap. 18, p. 112)

また、何を見ても家出をした母のことを思い出してしまうフィービーを見て、自分も母が出て行った後、同じだったとサルは回想する。

My father was right: my mother did haunt our house in Bybanks, and the fields and the barn. She was everywhere.

You couldn't look at a single thing without being reminded of her. (chap. 30, p. 195)⁹⁾

これはまるでサル之母が、人びとが死後に動物や自然として蘇るというお気に入りのインディアンの伝説通りに、自分自身も風景に溶け込んでしまったかのようだ。この二つのパッセージに共通する“haunt”という単語は「幽霊が出る」という意味と比喩的な「何かがつきまとう」という意味の両方に使われる。まだサル之母の死を知らない時点では読者はこれを後者の意味で捉えるのだが、母の死を知った瞬間にそこには前者の意味も加わり、この二つのパッセージに重層性が感じられる。一つの単語のレベルでもこんな仕掛けがあることが、この小説のうまさだ。

3. 詩

この小説には英語のバークウェイ先生が教える詩が三編登場する。そのうちの二つは詩人と詩のタイトルがわかるもの、そしてあとの一つは詩中の言葉が出てくるだけのものだ。登場する場面は少ないものの、それらの詩はサルに感情に大きな影響を及ぼしている。

ある日の英語の時間、情熱的な文学愛好家のバークウェイ先生がE・E・カミングズの「仔馬は生まれたばかり」という詩を生徒たちに紹介する¹⁰⁾。

He read a poem by e. e. cummings titled “the little horse is newLY” and the reason why the only capital letter in the title is the Y at the end of *newLY* is because Mr. Cummings liked to do it that way.

“He probably never took English,” Phoebe said.

To me that Y looked like the newly born horse standing up

on his thin legs.

The poem was about a newly born horse who doesn't know anything but feels everything. He lives in a "smoothbeautifully folded" world. I liked that. I was not sure what it was, but I liked it. Everything sounded soft and safe. (chap. 20, p. 123)

詩のタイトルにもなっている一行目の“the little horse is newly”のYの文字だけが大きく太字になっていることについて、フィービーは「この人は英語の勉強をしたことがないんじゃない」と得意の皮肉を言うが、サルはそのYがまるで仔馬が細い脚で立ち上がろうとしている様子のように好きだと思う。ケンタッキー州の田舎の農場で自然に囲まれて育ったサルは、都会の町で暮らすフィービーとは違い、生き物や自然のイメージを自分の感情の中に取り込むのがうまい。そしてサルはその仔馬が「なめらかに美しく折りたたまれた」世界に住んでいるというのが気に入る。

学校の帰り道、ベンがサルの手相を見てあげると言う。手を握られて初めは緊張していたサルだったが、手のひらをベンの指がなぞるうちに、授業で習ったあの詩の仔馬になったような気持ちになる。

The sun was beating down on us, and I thought it might be nice to stay there forever with him just running his finger along my palm like that. I thought about the newly born horse who knows nothing and feels everything. I thought about the smooth-beautifully folded world. (chap. 20, p. 124)

この場面では、ベンの手相見は結局サルの手を握るための口実だったことがわかりサルは機嫌を損なうが、しだいに惹かれ合ってゆく二人がついに最初のキスをする場面でもこの仔馬のイメージが使われる。しかも

それだけではなく、ウィンターボトム家に届いたメッセージの一つと、バークウェイ先生が授業で見せてくれた反転図形「ルビンの盃」のイメージも使われ、それまでに登場した三つのイメージが一つの場面で繋がる。

For one quick moment we both had the same agenda. I looked at him and he looked at me. Both of our heads moved forward. It must have been in slow motion, because I had a split second there to be reminded of Mr. Birkway's drawing of the two heads facing each other, with the vase in between. I wondered, just for an instant, if a vase could fit between us.

If there *had* been a vase, we would have squashed it, because our heads moved completely together and our lips landed in the right place, which was on the other person's lips. It was a real kiss. . . .

And then our heads moved slowly backward and we stared out across the lawn, and I felt like the newly born horse who knows nothings but feels everything. (chap. 37, p. 238)

サルは二人が同じ「すべきこと (agenda)」を持っていると感じ、二人の顔が近づく時に「ルビンの盃」が二人の顔の間に収まるだろうかと考え、さらに顔が近づくと、もし真ん中にその花瓶があったらそれを壊してしまっただろうと思う。キスの後でサルは自分が何も知らず、すべてに触れてみる生まれたばかりの仔馬になったように感じる。ティーンエイジャーの入り口に立ったサルの一つの大切な経験が、物語に織り込まれた三つのイメージを連ねて描写されているのだ。カダヴァー夫人への反感が同情へと転換する場面で五つのメッセージが連ねられていた時と同様に、ばらばらのイメージがひとつに収斂する小気味良さがある。

バークウェイ先生が英語の時間に紹介した二つ目の詩はロングフェローの「潮は満ち、潮は引き」だった¹¹⁾。

Mr. Birkway read a poem by Longfellow: “The Tide Rises, The Tide Falls.” The way Mr. Birkway read this poem, you could hear the tide rising and falling, rising and falling. In this poem, a traveler is hurrying toward a town, and it is getting darker and darker, and the sea calls to the traveler. Then the waves, “with their soft, white hands” wash out the traveler’s footprints. The next morning:

*The day returns, but nevermore
Returns the traveller to the shore,
And the tide rises, the tide falls.* (chap. 29, pp. 181-82)

バークウェイ先生がこの詩を波が寄せては返すようなリズムで読んだ後で、感想を聞かれたメーガンという女子生徒が「柔らかく優しく響いて、眠くなる」と答えると、サルはいつになく激しい反応を示す。

“Gentle?” I said. “It’s terrifying.” My voice was shaking. “Someone is walking along the beach, and the night is getting black, and the person keeps looking behind him to see if someone is following and a jing-bang wave comes up and pulls him into the sea.”

“A murder,” Phoebe said.

I went barreling on as if it was my poem and I was an expert. “The waves, ‘with their soft, white hands’ grab the traveler.

They drown him. They kill him. He's gone.”

Ben said, “Maybe he didn't drown. Maybe he just died, like normal people die.”

Phoebe said, “He drowned.”

I said, “It isn't normal to die. It isn't normal. It's terrible.”...

Ben said, “Maybe dying could be normal *and* terrible.”

(chap. 29, pp. 182-83)

旅人が砂浜を歩いている様子に、サルは「誰かが後ろをつけて来ないかどうか振り返りながら」という詩には描かれていないイメージまで付け加えている。しかも詩の中ではっきりとは語られていない「大きな波が旅人を海に引きずり込む」ということ、そして「白い柔らかな手で旅人を掴み、溺れさせた」ということを視覚的に解釈している。そしてサルの解釈の合間にフィービーが「殺人だ」とか「溺れた」という言葉を差し挟む。

サルの母の家出と事故死が、サルにこの詩をここまで激しく死に繋げて解釈させているのだろうし、フィービーもまた母が誰かに誘拐されたか殺されたかと思っているので、サルの解釈に同意する。ベンが「旅人は溺れたのではなくただ死んだのかもしれない。普通の人が死ぬように」という意見を出すと、サルは「死ぬのは普通のことではない。それは恐ろしいことなのだ」とまた反論する。もちろんこの時点で読者はサルの母の死を知らないが、サルが「旅人が誰かが後ろをつけて来ないかどうか振り返りながら」砂浜を歩いていると誇大解釈をするところに、母の失踪に対する心配や、あるいは母は自ら進んで家出したのではなく、誰かに強要されて家を出たと考えたいサルの悲しい希望を見ることもできるかもしれない。

サルがフィービーと一緒にフィービーの母の失踪を警察に初めて報告しに行くのは、この詩を読んだ日の夕方、その夜にはカダヴァー夫人の家にも二人で忍び込んで、何か手がかりを見つけようとしている。そして二度目に警察に行くのも、サルがこの詩を思い出している夜の翌日のことだ。旅人を海に引きずり込んだ波の詩が、フィービーの母を見つけようという二人の行動のきっかけになっている。カダヴァー夫人の家に忍び込んだ後、眠れなくなったサルがまたこの詩を思い出している。

... I lay there thinking of the poem about the traveler, and I could see the tide rising and falling, and those horrid white hands snatching the traveler. How could it be normal, that traveler dying? And how could such a thing be normal *and* terrible both at the same time?

I stayed awake the whole night. I knew that if I closed my eyes, I would see the tide and the white hands. (chap. 30, p. 197)

サルの心の中で、波の白い手には「ぞっとするような (horrid)」という強い形容詞が付け加えられている。授業でベンが言った「死は普通でかつ恐ろしいこと」という言葉に対しても、旅人が死ぬことがどうして普通でしかも同時に恐ろしいことでありうるだろうかと反駁する。サルにとって母の死は恐ろしいことではあるが、決して普通のこととは考えられない。目を閉じると波の白い手が見えそうで、サルは一晩中起きていた。母が間違いに誘拐されたというフィービーの主張を今までは信じていなかったサルが、人をさらう波のイメージに心を揺すぶられ、翌日フィービーを連れて警察に再び行くことになる。

パークウェイ先生の英語の授業でもう一つの詩が登場するのは、先生が夏休みの宿題として提出させた生徒たちの日記を、教室で紹介してい

る時だった。まさかみんなの前で読まれるとは思わずに好き勝手なことを書いた生徒たちは、いつ自分の日記が読まれるかとドキドキして待っているのだが、ベス・アンという女子生徒の英語の授業に対する気持ちが書かれている部分にロバート・フロストの「雪の夜、森の近くで立ちどまる」の一節が使われている¹²⁾。

Mr. Birkway turned a few pages in the same journal and read:

I hate doing this. I hate to write. I hate to read. I hate journals. I especially hate English where teachers only talk about idiot symbols. I hate that idiot poem about the snowy woods, and I hate it when people say the woods symbolize death or beauty or sex or any old thing you want. I hate that. Maybe the woods are just woods.

Beth Ann stood up. “Mr. Birkway,” she said, “I do hate school, I do hate books, I do hate English, I do hate symbols, and I most especially hate these idiot journals.”

... Mr. Birkway said, “Beth Ann, I know exactly how you feel. Exactly. I love this passage... It’s so honest... I used to feel exactly like this. I could not understand what all the fuss was about symbols.” (chap. 32, pp. 211-12)

ベス・アンは、英語の授業で先生が象徴について話すのが特にいやだと言う。「あの雪の森についての馬鹿みたいな詩」が嫌いだし、森が死や美やセックスを象徴すると人が言うのも嫌い。森はただの森かもしれない

じゃないか、と言うベス・アンに対して、バークウェイ先生はその率直なコメントを褒め、自分も学生の頃象徴が嫌いだったと意外なことを言う。

「あの雪の森についての馬鹿みたいな詩」がロバート・フロストの「雪の夜、森の近くで立ちどまる」であることは間違いないし、森が何を象徴しているか、というのはこの詩の話者が雪に埋もれてゆく森を「愛おしく、暗く、深い (lovely, dark and deep)」と描写している一節に由縁するだろう。その森の様々な解釈についてわかりやすく説明するためにバークウェイ先生が見せるのがあの「ルビンの盃」という反転図形で、絵の真ん中に白い花瓶が見える生徒もいれば、絵の両側に向かい合った二人の横顔を見る生徒もいる。そして先生はどうやれば花瓶と横顔の両方が見えるかを説明する。

Then Mr. Birkway pointed out how you could see both. If you looked only at the white part in the center, you could clearly see the vase. If you looked only at the dark part on the side, you could see two profiles. The curvy sides of the vase became the outline of the two heads facing each other.

Mr. Birkway said that the drawing was a bit like symbols. Maybe the artist only intended to draw a vase, and maybe some people look at this picture and see only that vase. That is fine, but if some people look at it and see faces, what is wrong with that? It *is* faces to that person who is looking at it. And, what is even more magnificent, you might see *both*. . . . “Isn’t it interesting?” Mr. Birkway said, “to find both? Isn’t it interesting to discover that snowy woods could be death *and* beauty *and* even, I suppose, *sex*? Wow! Literature!” (chap. 32, pp. 213-14)

このようにバークウェイ先生はこの絵を使って文学の象徴について語る。画家は花瓶を描いただけかもしれないし、花瓶だけが見える人もいる。だがその絵に二つの顔が見える人がいても、それはそれで構わないじゃないか。そして両方を見ることだってできる。あの森も、死であり美でありセックスですらあってもいいのだと。

この詩に関しては、サルが後になってそのイメージを回想する場面はないが、この授業でサルが触れた柔軟な考え方は、最終章で母の死を受け入れるサルの心に繋がっていると考えることもできる。その場面では、ギリシャ神話で習ったパンドラの箱とE・E・カミングズの「仔馬は生まれたばかり」の一節が組み合わせられて登場する。サルは祖父とプロメテウスやパンドラの神話について話し合い、フィービーのモカシンを履いてみて、母の家出を気遣いやカグヴァー夫人のせいにしないではいられなかったフィービーの気持ちを理解する。そして自分もこの一年数ヶ月の間、母が生きていて、家に戻って来てくれると信じたかったのだと、自分の感情をまっすぐ見つめることができている。

サルは、勇気とは悪いものが詰まったパンドラの箱を目を逸らさず見つめた後、もう一つの良いものが詰まった箱に視線を移すことではないかと思う。今まで母の死を何かの間違いだと信じたかったのは、パンドラの箱から目を逸らしていたことだと感じているのだ。世の中にパンドラの箱があるのは仕方がない。しかし、もう一つの箱も自分にはあるのだ。それは母の誕生日にルイストンの丘の上の墓を訪れて母の死を受け入れ、旅の途中で祖母の死をも経験した後で、サルが辿り着いた結論だ。

I decided that bravery is looking Pandora's box full in the eye as best you can, and then turning to the other box, the one with the smooth beautiful folds inside: Momma kissing trees, my Gram saying, "Huzza, Huzza," Gramps and his marriage bed.

(chap. 44, p. 277)

良いものが詰まったもう一つの箱の中には「なめらかで美しく折りたたまれた」世界が広がっている。それは木にキスをする母であり、「いいねえ、いいねえ」という口癖を繰り返す祖母であり、祖父が祖母の次に大切にしていた二人の結婚ベッドであるのだ。このサルに詰まっているものも、この小説の全篇をつらぬいて登場する大切な物語の一つ一つの太い糸であり、この時までには読者にとってさえ愛おしい物語となっているはずだ。祖父母との旅を終えてサルが到達したいわば悟りを描く場面にさえ、それまでにも何度か登場したギリシャ神話と詩が融合していることが、この小説における「物語」の大切さを語っている。

おわりに

最終章にはおまけのようにマザーグースのパロディーまでが登場する。バイバンクスに戻ったサルはフィービーやベンと文通をしていて、ベンは十月だというのにヴァレンタインの手紙を送ってくる。それが“Roses are red, / Violets are blue. / Sugar is sweet, / And so are you.”という四行詩マザーグースのパロディーなのだ。そしてサルも返事として同じマザーグースの詩型を使う。

Ben and Phoebe write to me all the time. Ben sent me a valentine in the middle of October that said:

*Roses are red,
Dirt is brown,
Please be my valentine,
Or else I'll frown.*

There was a P.S. added: *I've never written poetry before.*

I sent a valentine back that said:

*Dry is the desert,
Wet is the rain,
Your love for me
Is not in vain.*

I added a P.S. that said, *I've never written any poetry either.*

(chap. 44, pp. 279-80)

二人の「今までに一度も詩を書いたことはない」という追伸からもわかるように、バークウェイ先生の英語の授業で触れた詩が二人の心に浸透し、自分たちも稚拙ながらも初めて詩の形で感情を表現してみようとしたことを作者は描きたかったのかもしれない。

シャロン・クリーチはこの小説の内側に外の世界からの格言や神話や詩を取り込んでいるだけではなく、自分のいくつかの小説の間にも細かい糸を張り渡している。彼女の *Absolutely Normal Chaos* (未訳、1990) はサルのクラスメイトであるメアリー・ルーの夏休みの日記で成り立つ小説だ。『赤い鳥を追って』(*Chasing Redbird*, 1997) の舞台もケンタッキー州バイバンクスで、主人公ズィニーが「引越してしまった友だちのサル」を思い出す場面も登場する。*Bloomability* (未訳、1999) でスイスの寄宿学校に入学させられる主人公ドミニクもバイバンクス出身で、故郷の親戚からの便りには魚釣りの好きなズィニーのことが何度か描かれる。そして *Wanderer* (未訳、2000) でもバンバンクスの町の名が言及される。一つ一つの小説の世界は独立して成り立ち、これらの小説をバ

イバンクス・サーガと呼ぶほどの緊密な繋がりはないが、クリーチがテキスト間の結びつきに特別な興味を持つ作家であることは間違いない。

第1章でサルがバイバンクスの家の漆喰壁とその後ろに隠されていた暖炉を、フィービーの物語と自分の物語にたとえていたが、このイメージは最終章で繰り返されている。

Lately, I've been wondering if there might be something hidden behind the fireplace, because just as the fireplace was behind the plaster wall and my mother's story was behind Phoebe's, I think there was a third story behind Phoebe's and my mother's, and that was about Gram and Gramps. (chap. 44, p. 274)

暖炉の後ろにも三つ目の物語が隠されているかもしれない、それは祖母の物語かもしれない、とサルは最近思うようになった。この小説の続編を期待させる言葉のようでもあるが、しかし三つ目の物語は、すでにこの小説の中で書き尽くされている感がある。それはサルが祖父母に語るフィービーの物語やその過程でサルが回想する母の物語の中に、サルが織り込んでいった祖父と祖母の出会い、祖母が求婚を受け入れる理由になった祖父のビーグル犬セイディ、結婚のために祖父が父や兄弟たちと建てた小さな家、結婚式の日家具のないその小さな家に運び込まれていた祖父の両親の結婚ベッド、死にゆく祖母に祖父が初めて書いたラブレター、などの美しい物語だ。サルの言葉は、祖父母の物語も母の物語と同じくらいに自分の中で生き続けてゆくことを再確認している言葉だとも受け取れる。

小説の結末には、ベンとフィービー、カグヴァー夫人、パートリッジ夫人、パークウェイ先生がバイバンクスを訪れるのを、家をピカピカに

磨きあげて待っているサルと父の様子が描かれている。第1章から第43章まではすべて過去形の文章で綴られてきたが、この最終章ではサルの日常が現在形で語られる。このようにいくつもの「過去の物語」で織りなされてきた小説が、ここから先の「未来の物語」を予感させる終りになっていることにも、この小説に込めた作者クリーチの思いを感じざるをえない。

注

- 1) ニューベリー賞 (Newberry Medal) は1922年に創立された世界で最も古い児童文学賞。アメリカ合衆国で前年に出版された児童文学作品の中で最も優れた作品に与えられる。英国でこの賞にあたるのは1936年創立のカーネギー賞 (The Carnegie Medal) で、2002年にクリーチは『ルビーの谷』 (*Ruby Holler*, 2002) でカーネギー賞も受賞した。
- 2) タイトルは翻訳で出版されているもの。もきかずこ訳『めぐりめぐる月』 (講談社、1996年/偕成社、2005年)。
- 3) Sharon Creech, *Walk Two Moons* (HarperTrophy, 1994), chap. 2, p. 8. これ以降この作品からの引用は章とページを本文中で示す。
- 4) 二つ目のエピソードは、英語の授業でバークウェイ先生が生徒たちに「自分の精神はどんな形をしているか15秒で描きなさい」と言った時、サルとベンが全く同じ絵 (円の中にカエデの葉が入った絵) を描いた場面：

Then Mary Lou said, “Look at that—two are exactly the same.” People were saying, “Geez” and “Wow” and “Whose are those?”

The duplicate designs were: a circle with a large maple leaf in the center, the tips of the leaf touching the sides of the circle. One of the maple leaf circles was mine. The other was Ben’s.

(chap. 21, p. 130)

三つ目のエピソードは、バークウェイ先生が「ルビンの盃 (Rubin's vase)」という反転図形を生徒たちの前で掲げ、何に見えるかを聞いた場面：



“What is this?” he asked Ben.

Ben said, “It’s a vase. Obviously.”

Mr. Birkway held the drawing in front of Beth Ann. . . .

“Beth Ann, what do you see? . . . It’s okay, Beth Ann, what do *you* see?”

“I don’t see any idiot vase,” she said. “I see two people. They’re looking at each other.”

“Right,” Mr. Birkway said. “Bravo!”

“I’m right? Bravo?”

Ben said, “Huh? Two people?” I was thinking the same thing myself. What two people?

Mr. Birkway said to Ben, “And you were right, too. Bravo!”

(chap. 32, p. 213)

- 5) ベンが言葉で語るよりも漫画を描く方が得意であることは、「二つの月」の場面の他にも、フィービー・ウィンターボトムに「フリー・ビー・アイス・ボトム (Free Bee Ice Bottom)」というあだ名をつけて、お尻に氷をつけたマルハナバチの漫画を描く場面(第3章)や、サル黒い真っ直ぐな髪を見て「髪の上に座れる？」と聞いた後、長い黒髪のサンショウウオが髪でできた椅子に座っている漫画を描き、“Salamander sitting

on her hair” というタイトルをつける場面（第9章）で描写されている。
（Salamander はサルにあだ名。）

- 6) 盲目のパートリッジ夫人は自分の家の前を通る子どもたちの顔に触って年齢を当てたり、足音で誰が歩いているのかわかったりもする（第4章）。娘のカグヴァー夫人の留守にサルとフィービーが忍び込んで来た時も、彼女たちが家の中の何を見たり触ったりしているのかまで言い当てた（第30章）。この時にパートリッジ夫人がフィービーに言う台詞 “Oh, Phoebe, I think I met your brother.”（chap. 30, p. 193）は、後の場面の伏線となっている。その時は「私に男の兄弟はいない」と拒否したフィービーだったが、母がああ気違い青年を連れて家出から戻った後で、パートリッジ夫人が会ったのは自分の異父兄だったのだと思い当たる。パートリッジ夫人はその青年の顔に触って、顔立ちが似ていることに気がついていたのだ。

“Mrs. Partridge, when was it you met my brother?”

“You said you didn’t have a brother,” Mrs. Partridge said.

“I know, but you said you met him. When was it?”

“...Let’s see. Some time ago. A week? Two weeks?

He came to my house by mistake. He let me feel his face.

That’s why I thought he was your brother. He has a similar

face.”（chap. 40, pp. 253-54）

- 7) この他にも記憶喪失でルイストンから戻って来られなくなったとか、ルイストンに行ったのは誰かから脅迫状を受け取ったからだとかサルは想像した。母が家出をしたことを認められないフィービーが誘拐や殺人を考えた心理と同じだ。
- 8) 歌う木をアスペンに設定したことも偶然ではないだろう。アスペンは葉の莖が細く長いため少しの風にも葉を揺らす木で、「震えるアスペン（quaking aspen / trembling aspen）」とも呼ばれ、「悲嘆」や「哀悼」

を象徴する木だと言われる。

- 9) 亡くなった人が天国に行ったのではなく、土地そのもの、風景そのものの中にその人の霊を感じることができるという非キリスト教的な概念は、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) でヒースクリフが死んだキャサリンの存在をヨークシャーの荒野の至る所に感じる異端性を彷彿とさせる。やはりこれもサルがインディアンであるということと無関係ではないだろう。

- 10) “the little horse is newLY” (1950)
by e. e. cummings (1894-1962)

the little horse is newLY

Born)he knows nothing,and feels
everything;all around whom is

perfectly a strange
ness(Of sun
light and of fragrance and of

Singing)is ev
erywhere(a welcom
ing dream:is amazing)
a world.and in

this world lies:smoothbeautiful
ly folded;a(brea
thing a gro

Wing)silence,who;

is:somE

oNe.

(大意) 仔馬は生まれたばかり、何も知らない、すべてに触れる。仔馬のまわりは、太陽の光、匂い、歌、まるで知らないことばかり。嬉しい夢、驚き。一つの世界。このなめらかに美しく折りたたまれた世界に、息をしながら大きくなる静寂が横たわる。たった一人の誰か。

11) “The Tide Rises, the Tide Falls” (1880)

by Henry Wadsworth Longfellow (1807-1882)

The tide rises, the tide falls,
The twilight darkens, the curlew calls;
Along the sea-sands damp and brown
The traveller hastens toward the town,
And the tide rises, the tide falls.

Darkness settles on roofs and walls,
But the sea, the sea in darkness calls;
The little waves, with their soft, white hands,
Efface the footprints in the sands,
And the tide rises, the tide falls.

The morning breaks; the steeds in their stalls
Stamp and neigh, as the hostler calls;
The day returns, but nevermore
Returns the traveller to the shore,

And the tide rises, the tide falls.

(訳) 潮は満ち、潮は引き／夕闇が濃さを増し、シギが鳴く／茶色く濡れた砂浜を／旅人が町へと急ぐ／そして潮は満ち、潮は引き／闇が屋根に壁に舞い降りる／しかし海は、闇の中の海は呼ぶ／小さな波がその白い柔らかな手で／砂の上の足跡を消してゆく／そして潮は満ち、潮は引き／朝が明け、厩舎の馬たちは／馬丁の声に応え足を踏み鳴らし、いなく／朝は戻るが、旅人は二度と／海岸には戻らない／そして潮は満ち、潮は引き。

12) “Stopping by Woods on a Snowy Evening” (1923)
by Robert Frost (1874-1963)

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,

But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.

(訳) これが誰の森なのか私は知っている／彼の家は村の中だけれども／彼は知りようもない、私がここに立ちどまり／彼の森が雪に埋もれる様子を眺めていることを／私の小さな馬は何かおかしいと思っている／農家も近くにないこんな場所に立ちどまるなんて／森と凍った湖との間で／一年で一番暗い夜に／馬具の鈴を鳴らして馬が尋ねる／何か変じゃありませんかと／ほかに辺りに聞こえるものといえば／やさしい風と羽毛のように降る雪の音だけ／森は愛おしく、暗く、深い／しかし私には果たす約束がある／眠りにつく前にまだ何マイルもあるのだし／眠りにつく前にまだ何マイルもあるのだし。